

向井孝小詩集

ビラについて

一九八三年

目次

I

夕闇の中
『熱烈歓迎!?自衛隊様』
十一月二日の、戦争と平和
三尺高い木の枝の
しろい背中
阿倍野橋

II

深夜定期便
〈赤い鳥〉奇聞
怪談
夜景

III

同行四人
「遺留証拠物」報告書
張り込み捜査日録
表白文
一日―反原発10月行動月間―
ピラについて
〈泰山鳴動ラット作戦記〉
〈丁22・対関電交渉要領〉並びに補遺

あとがき的小詩論
末尾に付す

向井 孝
秋山 清

141 132 119 102 96 83 78 71 67 60

55 52 46 42 37 30 25 19 13 8

I

『熱烈歓迎?!自衛隊様』

十一月二日の、戦争と平和

三尺高い木の枝の

しろい背中

安倍野橋

夕闇の中

夕闇の中

1

公判傍聴を終つて、出てくると、まだ廊下に私服がうろうろしている。

通りすぎながら数えたら16人もいた。

裁判所構内を出ると、すぐ堂島川。

無人の階段橋を、二段とびに、とび上つて、わたる。

橋の真中、舞台のような石だたみの上で、

一しゅん、私はバレリーナ。

あたりをみまわして、

夕空の中で両腕をゆっくりはばたかせ、中之島図書館側へと舞い降りる。

それから、もう引潮のように、退勤時の人がふえだしている市役所まえ。

雲間がきれて、夕日がきいろく、一めんに射している。

中の島川のひろい河面の向う、うすむらさきにかすんだ朝日ビル。

あかね空に透けて、遠く小さく人影がうごく、わたなべ橋。

「はよかえろ。いま何してるやろ。おいちゃん……………」

2

このまえの傍聴は、おいちゃんと一しよだった。

橋のたもと、地下鉄淀屋橋の階段をおりてきて、切符売場へ曲ろうとしたとたん、おいちゃんが、ぱっと立止った。

それから廻れ右して、ゆっくり、東・西・南・北へミエを切った。

「これ、尾行除けのオマジナイ……………」

それをおもい出して、私は、一歩ふみ出しかけてから、ヤツとばかりに、うしろをふりむく。ところが……………」

人ごみの向うではっと、男が静止ノ映画のフィルムが切れたように、と、フィルムが動き出して、太い円柱のかけに、スーとはいっていった。

階段をおりきったところ、30才ぐらいの色黒、はげたおでこを前髪でかくした皮ジャンパー。

そのまま、いつまでも出てこない…………

「イヤヤなあ。あいつ、私のバレリーナ姿を、何から何まで、見てたんやろか。」

3

おいちゃんが云った。

「このままやと、すぐ一九八四年や。おそろしいナア…………」

「けど、逃げたらアカン。何ですか云うて、こつちから尾行したたらエエネン」

それで、円柱へ近よっていく。胸がドキドキ。

そおつとのぞくと、いたノ男が。キョロキョロ…………

それから——すぐそばで見上げてる私に気付いて、ギヤァー。

円柱のカゲからとび出す、もがくように人波をかきわけて、遠ざかろうとする。

私はびったりうしろにくつついて、彼が小走りすれば走る。とまればとまる。

北浜までの長い地下道。

とたんに脱兎のように走りだした。

と証券ビルの通路を見つけて、階段をかけあがる。くつ音が反響する。

地上にとびだす。

やにわ、歩道から、サクを越えて車道へ。

「あつ、あぶない」

車とぶつかりそうになってすりぬける。

やっと渡り切った向う側を、みるみる遠く、ちよつと片足をひきずるようにはねながら。

「でも轢かれんで、まあよかった。」
もう見えない。

きょう、一九七九年。二月二一日
夕闇の中。

「まだ、どこかで、誰かが見てるやろか。おいちゃん……」

『熱烈歓迎?!自衛隊様』

1

『みんな聞け。この列車の大阪駅到着は、4番線21時1分である。同じ列車ホームの左側3番線には、すでに専用列車西鹿兒島行きが待機している。』

全員一分二〇秒以内で、転乗する。

往路と同じく、一秒のおくれも許されない。

なお列車ホームは、民間人の立入りが全面禁止である。

したがって、関西方面出身者で、家族等の出迎えがあっても、面会はできない。

また、停車中、過激派分子がデモ等の挑発行為に出るおそれあり、との情報がある。

警務隊が出動しているから、われわれは一切無視、黙殺する。相手
にしてはならない。

いまより転乗完了まで、私語を禁ずる。

下車用意！』

みんな一せいに立上る。

鉄かぶと、戦闘服、雑のうの完全軍装。

せまい通路にびっしりと、体をおしつけて

夕やみの林のように。

2

列車が、大阪駅の大きな光の中へ、ゆっくりはいっていく。

車窓のうしろへ走っていくホームの売店のかげやき

向いのプラットに並列して電車をまつ乗客の、明るい雑沓が、のろ

のろと来て、停る。

「おい、手をふつとるぞ」

「おつ、女たちのでむかえ！」

『注意ノ窓際によつてはならん』

「あの小旗ふってる、あの娘、カッコイイ」

「そやけど、あの旗どうして黒丸や」

『全員、下車』

とたんに、突きとばされたように、ぼくらは車内からとび出してい
く。

たちまちホームにあふれ、ひしめきながら、停っている3番線の車
輦へとおしよせる。

3

北海道侵攻を想定した八列島縦断・兵員緊急輸送・復路作戦▽

乗継ぎ停車10分間の大坂駅。午後九時五分。

線路をへだてた隣りの2番線ホームは、がらんとして、駅員が両端
に二人だけ立っている。

と、急に地下道から、足音が反響して、二〇人あまりの男女が、階段をかけあがってくる。

小旗をふり、手をたたき、叫んでいる。

ホームの端を縦隊になって歩きながら、移動して眼の前にくる横断幕

“熱烈歓迎?!自衛隊様。お国のためなんかで死んだらアカンヨ”
“祈・武運長久!次は核ボタン戦争や!”

4

『ブラインドをおろせ!』

『鉄帽・装具は網棚にあげてよし』

『全員着席。デッキに立ってはならん』

発車ベルが鳴りつづけている

線路ごしの二番線ホームからきこえてくる声

「兵隊サーン」

「体に気をつけてー」

「ガンバッテー」

「お国のためにはガンバランでエエヨー」

「戦争になったら、逃げるんよー」

『注意ノ窓のすきまから外を覗くな』

「命令なんか、きかんでエエンヨー」

「イノチを大切にー」

がくと列車がゆれる。

向うのホームを走り出しながら、みんなが口々に叫んでいる。

「はよ、帰ってきてねー」

「つらかったら、やめるんヨー」

ブラットのはずれで立止り、一かたまりになって手をふる。

「戦死だけは、アカンでー」

「さよならアー」

だんだん遠く小さくなる光の中、
もう、見えない。

5

―いま列車は、神崎川鉄橋をわたり出す
そのひびきにまじって、ふときこえてくる声

夜空にさしのばして、いつまでも合図している何本もの手。

―さよ、ならア……

はっと自分の声に気付く。

あたりをみまわして、それから

―そうや、戦死なんかせんぞお―

―そんな命令などきかんぞお……

いま、一そうはげしい、轟音のなか。

十一月二日の、戦争と平和

1

新聞「催し」ランに記事が出てる。

自衛隊発足30周年記念行事。2日9時―

17時。式典、観閲式、訓練、展示。子供

天国、模擬店など。陸上自衛隊伊丹駐と

ん地で

「こんなときしか、見物だけへんで」

「行くんやったら、ビラつくろか」

それで、とつぜん手の中に入るほどの、小さな色紙ビラ二千枚。刷
つたり、折つたり、六畳の部屋は、戦場さながら。

とうとう、朝五時まで――

午前十時半。阪急伊丹駅。

ポケットをビラでいっぱいにくくらませて、降りてきた男女ゲリラ兵士、九人。

ところが駅前には、祝賀アーチどころか、案内板も見当たらない。家族連れの姿もない。

「なんも変ったところ、あらへんなあ」

「ちよつとは遠慮しとんのやろか」

とたんにトラックが三台、迷彩服の隊員を満載して、走りすぎた。

「やつぱり、ここ、基地や」

しかし、そのあとは、ただっぴろい国道の一本道を、テクテク、行軍三〇分。

エエ天気や——

伊丹市緑ヶ丘七丁目。陸上自衛隊中部方面總監部、伊丹駐とん地。

きょうは、大きく正門が左右に開いて、

すぐ左脇の立哨小屋に、イスが横二列。

若い隊員が十人、膝にこぶしをきちんとのせて、坐っている。

ひろい前庭。正面、本部建物の植込み。

そこを左へ曲ると、ぱあっと、遠くまで視界がひらけて、

うわあ、小学校の運動会や。

関東煮、ぜんざい、おすし……

道の片側に張ったテントのなかには

どっと笑い声があがって、家族にとり囲まれた隊員の、みんな、息

子や、兄弟や、恋人に戻った顔。

戦争の気配なんてどこにもない——団樂。

子供会とボーイスカウトのはしやぎ声。

「もう少し銃口を上。台尻はしっかり肩につける。息をとめて、……、そう……射て！」

お兄さんみたいな隊員が、一しよに腹這いになって、教えてくれる。

「よおし、命中。80点」

引金をひくと、実弾の代りに電子光線が出る。標的に命中すると、ランプがつく。

銃は、もちろん64式の本物。

だが今日は、その横の、迷彩をほどこした戦車だって、ジャングルジムや。

一五五ミリりゅう弾砲の砲身も、のぞきメガネと変わりはない。

やさしいお兄さんたちと、戦争ゴッコしてあそぶ、たのしい広場の

——平和。

6

ピラ渡そうとしたら、みな隊員の家族にみえる。

手も足も出えへん。

もらったピラを手に小学生は、すぐ、お兄さんとこへ走っていきそうや。

ええい、パアツと空中にまきちらしてーピラ爆弾ーと思ったとたん、横丁から赤い腕章の警務隊。

こらアカン。……自分の心が縛られてしてもて、どうしようもない。

——考えてみると、家族たちの平和をかきみだして、

戦争を仕掛けるのは、こっちになつてゐるやないか……

見物してぐるぐる歩きまわって、四時間。

せつかくつくつてきたんやからと、

ミカン色のピラの束を、電話ボックス、便所の棚、食堂のメニューの下に、こっそり仕掛けてきたけど、

「自爆」せんかったのが、せめてのこと。

そこで、ゲリラの戦陣訓。

「平和の力をこそ、自分のものとして闘うのでなければ、アカン」
そして、きょうの出撃戦果は——ああ、くたびれたなア。

三尺高い木の枝の

1

横は図書館、うしろは藤棚の大露台
見上げる空にヒマラヤ杉が一本
ずうっと枝をのばしている、広場。

「何を、しはりますねん」

「もうすぐ、判りますわ」

道具だては——

いま、坂道を運んできた大きなつい立てと幕
それに線香・ローソク・一輪挿しの菊……

2

ヒマラヤ杉の一本の枝から、白いロープが垂れ下る。

その先端でゆれる丸い輪。

と、両脇をかかえられて、曳き出されてくるのは、私。

明るい午後の日射しの中

手錠。めかくしの黒い頭巾。

木箱の上に立った体が

とたんに、がくと跳ねて、

宙吊りの、いつまでもゆれる、私の夕闇。

3

『あなたは死刑に賛成ですか』

路上に置いた長い横断幕が、風ではためく。

「そら、殺されてあたりまえや」

ちよつと立止って、すぐ歩き出す人々。

「足ぐらい引っぱったるで」

「死んでお詫びせんかい」

子供が走りよってきて、走り去る。

「悪いことしたらアンナになるんやで」

私の体の中を通り抜けていく、百千の足音

「死刑なんて、うちら関係あらへん」

さりげなく、なんども私を処刑する、おまえのやさしいまなざし。

4

通天閣の空から、西日が烈しく照してくる。

「そろそろやめよか」

「もう、何時や」

遠くの芝生にねそべっている何組もの恋人たち

かけまわっては親のところへ走っていく子供らの声。

動物園の森から、風にのって、とぎれとぎれに閉園アナウンスがきこえてくる。

きょう、二時間半、十二人で集めた「死刑廃止署名」は、あわせて

「そんなに許せんかったら、あんたが自分で殺ったらエエのとちがいますか」

「なんでそれを国に任せておけるんや」

「国家が、金持や権力をもった奴を、死刑にした、なんてこと聞いたことない」

「死刑になるのは、貧乏人や弱い者だけや」

「アジアの人民五千万殺した天皇、どうなってますねん」

「水俣のチッソの社長、放つといて、それでエエんか」

「そやのに、なんであんたが死刑に賛成なんや！」

公園出口の木立のなかへ、帰りの人影が続いて、吸い込まれるように消えていく

ふりかえると、もうがらんとして

坂の上の広場の一本のヒマラヤ杉。

その空に透^{すか}した枝に、

まだ、ぶらさがってゆれている

私の小さな夕闇。

しろい 背中

ソン・サンジンが死んだ。

宋相振！

× × ×

その名前は、ぼくが広島デモにいったとき、
ぼくの背中にかけられた文字だった。

デモの出発点、平和公園原爆の子の像の前で
順番に「これ」と渡されて受けとった

ゼッケンに書かれた名前だった。

養蜂業。元人民革命党員。ソン・サンジン。

たゞそれだけしか、五五名の一覧表には説明がない。
ぼくの智識はそれだけ。

宋相振 46才 死刑。

そのプラカードを掛けたとき

ぼくの背中が熱くなった。

そのときいきなり、ぼくはきみになった。

ソン・サンジン！

× × ×

韓国軍法会議で死刑判決をうけた九人。

無期の二十人。十五〜二十年懲役の二六人
あわせて五五人の政治囚。

都礼鐘。ト・イエジョン。 50才

河在完。ハ・ジェウアン。 42才

李鉄乗。イ・チオルビョン。 36才

ぼくらひとりひとは、白い上衣に青いズボンの韓国衣装をつけ
名前をかいたプラカードを吊して並んだ

デモの指揮者K君は、軍服を着た朴大統領に扮して
大声でどなった

「ヤイヤイ、さあ歩け、歩きだすんだ」

ムチがひゆうと耳許で鳴った

ぼくはデモの先頭だった。

しっかと腕組みをし、天をにらんで、

ゆっくりゆっくり、大股で歩き出した。

ソン・サンジン！

きみならきつとそうしただろう。堂々と――

そのように、ぼくも。

× × ×

きみには聞えただろうか。

広島で一番賑やかな本通り商店街アーケードの中ほどで
ぼくは声をかぎりに叫んで、舗道に坐りこんだ。

「アイゴー」

（ぼくの知ってる韓国語は、それと、「オンバー」と「キムチ」
ぐらいなのだ。）

すると、思いがけず、後方から

一せいに唱和がおこった

ふりかえると、二メートル間隔で

ずうっと続いた白い上衣が

人垣に囲まれて、はるかまで、小さく坐っている。

響鳴が消えたあと、奇妙なはずかさが支配した。

その一刻、ぼくはきみだった

きみはぼくだった。

たしかに、きみはぼくのなかに来て、

そこに坐りこんでいた。

× × ×

それから七カ月。

ソン・サンジンがとつぜん処刑された。
他の七人とともに。

四月九日、牢獄から引き出されて

そのまま死刑台へ歩いていった、ソン・サンジン。

それは、朝か、昼か、夕方か、

そのとき、ぼくは一体何をしていたのだろう。

× × ×

四月八日。夕刻から大和郡山へSさんの見舞いに。

帰宅後、ガリ切り。

四月九日。午後、姫路ユキ。買物して母の夕食つくりと洗濯。夜テ

レビ。

四月十日。午後三時天王寺着。ふう子さんを呼び出して、天王寺公園サンボ。

一合ビンとすしを買い、美術館よこの一本だけさいている桜の下で花見。

四月十一日。戦前のアナキスト林隆人さんのお通夜。深夜2時ごろか

えって、ハガキ10通ほどかいて出す。

× × ×

ぼくが、人と出会って、道ばたで立話していたとき、

それとも列車で、文庫本をよみながら、うとうとしていた間に

きみは既に、息絶えて、台架の上に横たわっていたのだろうか。

あのデモで、ぼくの背に刻まれたきみの名前は

もう、ない。

あのとき—きみだったぼくは—何時からいなくなってしまったのだ

ろう

ぼくが丸つきりきみのことを忘れて

ちよつぴりも思い出すことがなかった、長い間—

思えば、ぼくの背中へ、とつくの昔にきみの名前を消して

まっしろになっていたのではなかったか。

もう、これっぽっちの関係でもなかった
ぼくときみ！

だから、ソン・サンジン

どうしようもなく黙ってきみは

死なねばならなかったのか。

たゞ、しろい背中を、ぼくに残して……

阿倍野橋

1

東西南北、九本の階段をもつ大陸橋。

南海上町線阿倍野橋終点は、その大陸橋の下、

道路の真中から、いまでも発着している。

たゞ、昔とちがうのは、両側歩道に柵ができて、ほんの六・七歩
の中なのに、路面横断は禁止。

だから、その乗り場へは、陸橋を昇って、中ほどの、左へ急に降
りていく狭い階段か、

地下街広場の案内所横から奥へとはいっていく、くらく細長い専
用通路だけ。

その上、終点駅といっても、二本の線路両脇にならんだ、ちょっ

とだけ高くなっている長い石だたみの台だけ。

ブラットも屋根もない吹きさらしだ。

走ってるのは、大正時代から変らないチンチン電車。ペンキだけ明るくぬりかえたやつ。

発車するとすぐ、黒い鰐口カバンを下げた車掌がやってきて、二枚つぎりの長い切符にパチンパチンと鋏を入れる。むかしぼくが中学へ通ったときと全く同じだ。

だが、以前、ほんの二百メートルほどの処にあったへときわ通りといった停留所や、そこらに十軒ばかりならんだ古本屋は、

デパートからつづくハイカラな商店街になって、消えてしまった。しかし、よく晴れた日、陸橋の真中に立つと、ビルと高速道路の向う、東の遠くの空には、生駒山が連なつて、

ぼくにはたしかに、子供のときのつた飛行塔が、小さく小さく、ぐるぐる廻るのが見えてくるのだ。

2

勤めをやめた第一日目の午後。

どしゃぶりの中を出かけて、パチンコ屋で二時間。ハイライト20コをかせいだ。

帰りみち。横なぐりの雨のなか、誰も通らない陸橋の空を、泳ぐように渡っていった。

「…生駒山は？…」とふりむいたとたん、何かの合図のように、手中の傘が舞い上った。

しゅんかん、灰色の空一めんから喚声をあげて、左右縦横にクルマが疾駆してくる。

袋からこぼれたハイライトが、車体につつかって、弾丸のように飛びまわる。

もう一歩も前へ進めない。

びしょぬれになつて立ちすくむぼくに、とびおりる以外逃げ道は、

ひとつしかないのか

眼下はるか、上町線乗り場にびっしり重なりうごめいている黒い傘の群がりを見た。

屠所への通路のように、その群がりへ垂れさがる階段。

と、一しゅん大雨粒に叩かれて、黒い傘が大きく波立つ。

そのざわめきの、白いちらりとゆれたすき間からみえた――たしかにぼくの昨日が一せいに、そのとき――ぼくの今日を見上げてきたのだ。

II

深夜定期便

〈赤い鳥〉奇聞

怪談

夜景

同行四人

遺留証拠物報告書

張り込み捜査日録